

比良山系と丹波山系との間を安曇川が流れ、若狭街道(鯖街道)が京都・大津と若狭を結んでいます。葛川は貞観元年(859)、相応和尚が不動明王を感得した修行の聖地とし、草庵を建立しました。天台修験の道場、葛川息障明王院です。毎年7月16日から20日まで行者が籠もる葛川参籠が行われています。

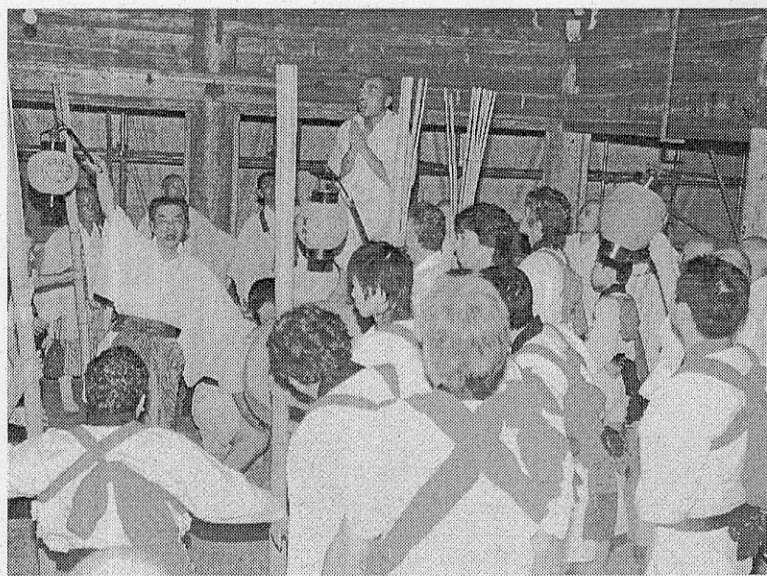
16日、早朝、行者約40人が比叡山を出立して西近江路を北上し花折峠を越えます。約30きの道のりです。いで立ち回降行と同じ不動明王を表す白装束の浄衣姿です。沿道では人々がひざまずき、お加持を受けます。昼ごろ、途中集落の勝華寺に立ち寄り相応のお世話をした宮垣家の案内で花折峠に向かいます。峠からは相応を三の滝へ導いた常喜・常満(地主神・志古淵明神の眷属、鬼の様相をした浄鬼と浄満の二童子)が明王院まで先導します。夕日が山々を照らすころ明王院に入り、以後は地主神社と三の滝へ参る以外は明王谷川に架かる三宝橋を渡ることなく、昼夜を問わず修行を続けます。これ

は蓮華会の夏安居といわれる行で、かつては秋にも法華会が執り行われていました。

11世紀の藤原明衡著『新猿楽記』は、全国修行場の一つに葛川をあげています。後白河法皇撰『梁塵秘抄』には葛川への道名が記され、藤原兼実の日記『玉葉』は治承5年(1181)6月18日、弟慈円の葛川参籠を記しています。永和2年(1376)「北嶺修験行者起請文」「葛川明王院文書」では回降行と葛川参籠は「車の西輪の如し」と表現される重要な修行とされ、回降行者は葛川参籠に参加しなければ満行と認められません。

大津市歴史博物館では「回降行が孤独な行であるのに対し、葛川参籠は集団による厳しい行」と解説されており、大先達から先達・新達、初めて参加する新行にいたる集団で、相応の足跡を追う修行を通して行者として自覚し、木

葛川参籠と太鼓回し



葛川参籠の太鼓回し

動明王と一体化するための実践修行といわれています。

室町時代になりますと、足利義満や義尚、その母、日野富子をはじめ守護などの参籠札があり、回降行者に加えて武士層も参籠していたことがわかります。現在の形での葛川参籠は天正12年(1584)6月からの行者起請文があることから、元龜2年(1571)の信長の比叡山焼き

討ち後の復興と、千日回降行再開後もなくと考えられます。

行の3日目、18日は地主神社の大祭です。各村々から高張り提灯が奉納され、深夜に「太鼓回し」が行われます。この行事は太鼓飛びともいわれ、数本の提灯の明かりの中、村の若衆が直径1・2尺の大太鼓を本陣床で激しく廻し、回転を止めた太鼓に行者

が乗り、合掌して勢いよく飛び降ります。この姿は相応が葛川三の滝で不動明王を感得した故事にならっていると考えられています。

翌19日早朝、行者は常喜・常満の先導で三の滝へ滝詣りに向かいます。相応伝には老翁(志古淵明神)が現れ、第三の霊瀑は都卒天の院内(弥勒菩薩が住む浄土)に通じる浄地で必ず不動明王に遇うことができると教え、葛川を仏法修行の霊地として護るといって姿を消したとあります。

相応は飲食を断ち、修行を続けること17日目、滝壺から不動明王が現れます。飛び込み抱きついた不動明王は桂の古木となり、その霊木から不動明王を三体刻み明王院、比叡山無動寺、近江八幡市伊崎寺のご本尊とされたといわれています。このように霊瀑を神聖視した滝行は各地にあります。垂直に落下する純白無垢の水に人々は神や仏を感じたのでしよう。明王谷川の霊水は安曇川と合流し朽木を経て琵琶湖に注いでいます。

20日、葛川での修行を満了した行者は比叡山へ戻っていきます。現在、明王院は平成18年度から保存修理工事が行われています。修理工事はあと1年、完成が待たれます。

(滋賀県文化財保護協会 葛野泰樹)

集団による勇壮な修行